

西北ジュニアウインドブラス 県大会で金賞受賞

7月31日、リンクステーションホール青森において開催された「第64回青森県吹奏楽コンクール」小学生の部で、西北ジュニアウインドブラスが見事金賞を受賞。出場した13団体のうち上位3位にも入り、第65回東北吹奏楽コンクールへの切符を手に入れました。

この日、所属する本市の児童のうち、森田小5年生の佐藤 芯太君と外崎杏香さん、瑞穂小5年生の宮垣颯太君の3人が、その喜びと東北吹奏楽コンクールへの抱負を倉光市長に伝えました。3人は「県大会はちょっと緊張した。音が力みそうになった」と振り返り、「東北大会では、さらにうまく演奏できるように練習したい」と抱負を語りました。

倉光市長は「自分の思いを楽器にのせて東北大会がんばってきてください」と激励しました。



8/19 市役所
結成2年目にして金賞に輝いた西北ジュニアウインドブラスの宮垣君(左)、佐藤君(中)、外崎さん(右)

交通死亡事故ゼロ300日を達成



8/25 市役所
表彰状・感謝状を受け取る母の会連合会の山本会長(中)と今副市長

令和3年に柏地区で発生した交通死亡事故から300日間の交通死亡事故ゼロの記録を達成し、県警察本部長から市交通安全対策協議会(倉光弘昭会長)に感謝状が贈られました。

感謝状は、県警察本部小田桐勝行交通部長から伝達され、市交通安全母の会連合会(山本薫会長)にも表彰状が手渡されました。

山本会長は「日頃の地道な活動の成果が300日間の記録につながったと思います。今後も黄色い服を着て500日間達成を目指して活動を続けていきます」と目標を話しました。

母の会では、市内の7小学校と幼稚園や保育園など16施設にのぼり旗や手旗を寄贈するなどの活動を通じて、交通事故防止に取り組んでいます。

第44回上原げんと杯争奪のど自慢大会 頂点決定

上原げんと杯実行委員会(川嶋大史会長)が「第44回上原げんと杯争奪のど自慢大会」を松の館で開催。7月31日に行われた予選には県内外から81人が参加。8月27日は、その予選を勝ち抜いた30人による準決勝と、準決勝上位10人による決勝、さらには決勝上位3人による優勝決定戦が行われました。集まった聴衆約300人は、力が入った歌に聴き入りました。

見事優勝に輝いたのは、決勝で「なぐさめ」(冴木杏奈)を歌った七戸町の中村正子さん。「これまでげんと杯では最高3位。8年くらい歌を止めていた時があったが、仲間にも支えられ、優勝できて一生の思い出になった。げんと杯の名に傷をつけないよう、これからも歌っていきたい」と込み上げる思いを語りました。



8/27 松の館
昨年の予選敗退から優勝を勝ち取った中村さん

祝う・楽しむ・学ぶ JOMONまつり開催

9/3 田小屋野貝塚



小林学芸員の解説に熱心に耳を傾ける参加者たち

世界文化遺産登録1周年を祝いNPO法人つがる縄文の会（川嶋大史理事長）と市教育委員会が「JOMON亀ヶ岡遺跡・田小屋野貝塚まつり2022」を開催しました。

まつりでは、今年発掘調査した田小屋野貝塚の現地説明会を行い、小林和樹学芸員が「過去に人骨が出土した地点の北側で、同時期の竪穴建物跡を確認できた。居住域がさらに広がるのが明らかになった」などと解説しました。説明会に参加した澤田衣公子さんは「貴重なものを見ることができて良かった。もっと縄文が盛り上がりしてほしい」と感想を話しました。

このほか、まつりでは、ベンケイガイ貝輪づくり体験や土器の拓本とり体験、登山囃子などのステージイベントも行われました。

また、木造高校情報システム系列3年生の成田紗埜さん、古川しおりさん、岩川萌香さんの3人が、世界文化遺産に登録された市内の遺跡をPRしようと、VR（仮想現実）を視聴できる専用ゴーグルを開発。遮光器をデザインした専用ゴーグルにスマホを付けて、遺跡の案内動画を3Dの立体映像で楽しむことができます。この日、試作品をお披露目し、来場者50人にプレゼントしました。

開発を手掛けた3人は「ゴーグルを付けると360度見渡せ、臨場感が味わえる。見る人に情報を分かりやすく伝えられるように動画を編集した」と出来栄に自信をのぞかせていました。



装着するとまるで遮光器土偶のように見えるVRゴーグルを開発した岩川さん(左)、古川さん(中)、成田さん(右)

瑞穂小児童 ごみ処理を学ぶ

9/9 一般廃棄物最終処分場



スプリンクラーの操作を体験する児童たち

瑞穂小学校（桑村哲二校長）の4年生30人が、社会科の授業で西部クリーンセンターとつがる市一般廃棄物最終処分場を見学し、ごみのリサイクルや処理の流れなどを学びました。

最終処分場で児童たちは、ごみに水をかけるスプリンクラーの操作を体験。散水は、ごみの汚れを落として臭いの発生を低減し、粉じんの飛散防止や、ごみのかさを下げるために行っていることなどを教わりました。また、最終処分場には年間1,579トンのごみが持ち込まれ、家電や金属類などのリサイクルできるものは専門の業者に売り渡していることなどの説明に耳を傾け、ごみのリサイクルや減量への理解を深めました。

見学を終えて、越後谷脩楽君は「ごみに水をかける理由がよく分かった」、工藤瑚子さんは「たまに分別が面倒くさいと思うときもあるけど、しっかりやっていきたい」と感想を話しました。